



# ラリックの花鳥風月

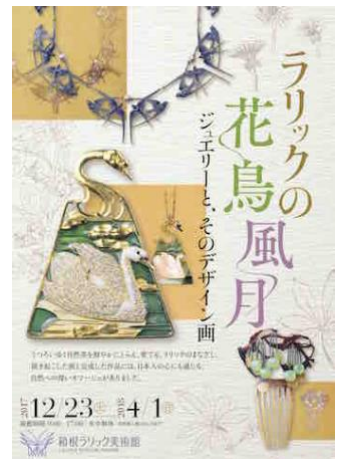
## ジュエリーと、そのデザイン画

2017年12月23日(土)～2018年4月1日(日)

このたび箱根ラリック美術館では、来る12月23日より「ラリックの花鳥風月 ジュエリーと、そのデザイン画」を開催します(2018年4月1日まで)。

フランスの芸術家、ルネ・ラリック(1860-1945)と聞いて、まず何が思い浮かぶでしょうか。より多くの作品が世に出回るきっかけとなった香水瓶かもしれません。しかし、それは、彼の人生の後半の一つの分野にしか過ぎず、人生の前半は、独創的な作品を生み出すジュエリー作家として活躍していました。石油王グルベンキアンや、フランスを代表する大女優サラ・ベルナールといったセレブリティたちを魅了し、1900年に開かれたパリ万博では、グランプリを獲得するなど、宝飾作家として不動の地位を築いたラリックの斬新なジュエリーの数々。それは、当時主流だったダイヤモンドやルビーなど高価な宝石を多用する伝統的なものではなく、生き生きと花を咲かせる植物や飛び交う鳥、光を受けて輝く水面など、自然の美しさを鮮やかな七宝で表現したデザイン性豊かなジュエリーだったのです。

こうした命が輝く一瞬を描いたジュエリーを生み出すことができたのには、自然豊かなフランス・シャンパーニュ地方で過ごした幼少期の経験、七宝やガラスなど新しい素材の使用、そして当時流行していたジャポニズムの影響など様々な要因がありました。本展では、ラリックのジュエリーと、出来上がりをイメージして描かれた緻密なデザイン画を展示し、独創的なラリックジュエリーが誕生した背景に迫ります。完成したジュエリーはもちろん、そのデザイン画からも感じ取れる自然へのこだわり。声なき声に耳を澄ませる柔らかな感性と、日本人のころにも通じる、うつろいゆく自然を愛で慈しむまなざしから生まれた作品の数々をお楽しみください。



### ■企画展内容

#### ①ラリックと自然の造形

フランス・シャンパーニュ地方のアイ村で育ったラリックは、自然を愛する祖父の影響で、自然とふれあい、植物や昆虫を観察してはスケッチを楽しむ幼少期を過ごしていました。その経験は、自然を見る目を養い、生涯を通して変わることのない、創作の原点となりました。ここでは、ラリックが植物を描いたクロッキーなどを展示します。何が描かれているのかひと目で植物が特定できるものもあるほど、特徴を捉えたラリックの観察力をご紹介します。



クロッキー「ハシバミ」

#### ②素材の追求 鮮やかな色彩を纏うジュエリーの誕生

16歳で金銀細工師に弟子入りし、宝飾職人の道を歩み始めたラリックは、22歳でカルティエやブシュロンなどの一流宝飾店の下請けデザイナーとして活躍、順調にキャリアを積んでいきました。しかし、彼が目指していたジュエリーは、宝飾店から依頼を受けるようなダイヤモンドやルビーなど高価な宝石を多用する伝統的なものではなく、自然が持つ本来の美しさをモチーフにし、デザイン性が高く豊かな色彩を纏った今までにない宝飾品だったのです。1895年、35歳のラリックは、今まで誰も見たことがな



ペンダント「白鳥」

いものを目指して、鮮やかな色合いを七宝で表現し、また、獣角やガラスなど、新しい素材を使用した独創的で斬新なジュエリーを本格的にスタートさせたのです。これまでにないオリジナリティ溢れるデザインのジュエリー制作に必要なのが、緻密に描かれたデザイン画です。ラリックは、頭の中で思い描くジュエリーを形にするため、まずデザイン画を作成し、それを基にジュエリーを制作していました。当時、パリ・テレーズ街 20 番地に工房を構え、30 人ほどいた職人たちにラリックの意図を伝えるために、デザイン画は必要不可欠なものだったのです。

### ③デザイン画を読み解く

ラリックのジュエリー制作に欠かせないデザイン画には、指示書きされているものがあります。石の種類や七宝の色の指定、そして、制作過程で生じる誤差の範囲や、ジュエリーの仕様など、ラリックが目指すジュエリーを形にするため細かい指示のもとに制作されていたことが分かります。



デザイン画・櫛「スカラベ」



ペンダント「フジ」

### ④ラリックこだわりのジュエリー制作

緻密に描かれたデザイン画と、実際に形になったジュエリーから見られる、ラリックのジュエリー制作のこだわりをご紹介します。デザイン画とジュエリーの一致点や、対象の入念な観察によって作られたジュエリーをご覧ください。

### ⑤日本のこころをさがす

19世紀後半に、日本の美術品・工芸品がヨーロッパに衝撃を与え、沸き起こったジャポニスムブーム。身近な植物や動物、昆虫たちが題材となり、しかもそれを表情ある姿で描き出す観察力や感性、鮮やかな色彩や輪郭線の多用、大胆な構図は、モネやゴッホなど、当時の芸術家に大きな影響を与えました。“誰もみたことのないジュエリー”を目指していたラリックにとっても例外ではなく、異国の文化は新たな感性を刺激するものでした。ここでは、ラリックの作品に見られる日本的な要素や、日本人だからこそ感じられるラリックの魅力に迫ります。

\*\*\*\*\*

## ルネ・ラリック René Lalique (1860-1945)

アール・ヌーヴォーからアール・デコへの架け橋となったフランスを代表する芸術家、ルネ・ラリック。16歳で宝飾職人に弟子入りした彼は、すぐにその才能を開花させ、22歳でカルティエなどの一流宝飾店から仕事を依頼されるように。1900年のパリ万博で発表したジュエリーは見事グランプリを受賞し、一躍その名を轟かせました。その後、コティの香水瓶をきっかけにガラス工芸家に転身。オリエン特急行や豪華客船ノルマンディー号の室内装飾など、幅広いジャンルで独創性あふれる作品を手がけ話題を呼びました。



会期:2017年12月23日(土)~2018年4月1日(日)

開館時間:9:00~17:00 (※年中無休/美術館入館は16:30まで)

入館料:大人1500円/大・高生・シニア(65歳以上)1300円/中学生・小学生800円

所在地:神奈川県足柄下郡箱根町仙石原186番1 TEL:0460-84-2255

**2017年12/23~2018年4/1 箱根ラリック美術館にて開催**

箱根ラリック美術館公式サイト [www.lalique-museum.com/](http://www.lalique-museum.com/)

【お問い合わせ】箱根ラリック美術館 (広報担当:杉山、古川) TEL:0460-84-2255